

保育科学生と他学部生の親準備性の比較

—保護者理解と支援に向けて—

佐々木 真吾・山田 真歩*

The Comparison of Readiness for Parenthood between Students Majoring in Early Childhood Education and those of Other Students

Shingo SASAKI and Maho YAMADA

要 約

本研究では、保育科4年生、1年生、他学部生を対象に、親準備性の獲得状況と子どもへの関わり方を調査した。その結果、親準備性の下位カテゴリである、乳幼児への好意感情、育児への積極性、育児機会、育児への自信、親になるイメージの全てにおいて、保育科4年生と1年生の獲得状況は同程度であり、他学部生よりも高い状況にあった。また、他学部生のうち、親準備性を十分に獲得している者は、保育科4年生と1年生と同様、子どもに積極的に関わる様子が示された。これに対して、親準備性を十分に獲得していない他学部生は、子どもへの関わりを回避する様子が示された。以上のことから、保育科学生の親準備性は保育士養成校の入学前に培われること、他学部生であっても親準備性の獲得状況には個人差があること、親準備性の獲得が不十分な者への支援が特に必要であることが示唆された。以上をふまえ、保護者理解と支援の在り方を考察した。

キーワード：親準備性、保育科学生、子育て支援、保育士養成課程、女子大学生

1. 問題・目的

平成20年告示の保育所保育指針において「保護者に対する支援」の章が新設されて移行、子育て支援の重要性が高まっている。平成29年の改訂では、新たに「子育て支援」の章が設定され、保育現場での子育て支援は、現代社会に生きる子どもの健全な発達のためには欠かせない状況になっている。保育士養成課程においても、子どもの発達やそれに関わる家庭についての基礎的・実践的な理解を目指して、「子ども家庭支援の心理学」や「子育て支援」などの科目が新設された（保育士養成課程等検討会，2017）。保育士養成課程の中で、子育て支援の意義を十分に理解し、保護者に対する支援の基盤を身につけることが求められるようになったといえよう。

子育て支援の必要性が唱えられるようになった背景に、社会状況の変化による親の養育力の

* 春日井市立柏原保育園

低下が挙げられる (e.g., 陳, 2007; 岡本・古賀, 2004)。核家族化や少子化、地域関係の希薄化のため、幼い子どもと関わる機会が減少した。その結果、親になるまでに、子どもに接する態度や、子どもと関わる知識や技術を身につける機会がないという状況が、親の養育力の低下を引き起こしている。子育て支援の基本は、親の養育力を高めることにあるといえる。

一般に、親としての役割を遂行するために必要な子どもや育児に対する態度、知識・技術のことを「親準備性」という。岩田・秋山・井上・深谷 (1982) によると、親準備性は「望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期 (青年期) における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態」と定義され、その獲得に関わる要因がこれまでに検討されている。例えば、榎澤・福本・岩立 (2009) は、母親、きょうだい、教師などの他者との関わりが親準備性の獲得に影響を及ぼすことを明らかにしている。大学生対象の調査の結果、男女差はあったものの、母親や教師からの被養護体験、弟妹の養護体験が親準備性の獲得に重要であることが示唆された。また、礪波 (2011) は、弟妹や身近にいる乳幼児との関わりが親準備性の獲得に影響を及ぼすことを明らかにしている。具体的には、おむつを変えるなどの身近な世話をする経験が乳幼児に対する肯定的なイメージを高めること、衣服を着替えさせるなどの日常的な世話をする経験が子どもと関わる自信に繋がることを明らかにした。以上の研究から、親になるまでの身近な大人や子どもとの関わりが、親準備性の獲得に影響を及ぼすことが示唆される。

また、若者の親準備性を育てるために、家庭科教育において子どもの発達や保育に関する内容が扱われている。高校生を対象に、家庭科教育における保育学習の効果を検討した鈴木・六車 (2019) は、中学校までに保育施設への訪問経験がある生徒は、訪問経験がない生徒よりも親準備性が高いこと明らかにした。また、訪問経験がない生徒であっても、高等学校の保育学習により親準備性を高めることが可能であることを明らかにした。さらに、川瀬 (2010) は、子どもとふれあうボランティア体験が大学生の親準備性を高めること、水口・中新・井上 (2017) は、親になることについての教育を受け、それが心に残っている者ほど、子どもや育児に対する好意感情が高いことを明らかにしている。以上の研究から、子どもや育児に関する教育により、親準備性は獲得可能であることが示唆される。

それでは、子どもについての知識・技術を専門に学ぶ保育科学生は、どの程度親準備性を獲得しているのだろうか。子どもと関わるモデルを保護者に示すためには、養成校卒業までに、ある程度の親準備性を身につけておくことが求められる。先行研究から考えると、保育科学生は他学部生よりも親準備性を身につけていることが予想される。しかし、贅・中川 (2016) は、看護学生を対象とした母性看護実習の研究で、実習中の乳児や母親と関わる経験が、育児に対する自信を低めることを明らかにしている。これをふまえると、保育科学生も、保育実習を経験することで育児に対する自信を低める可能性が考えられる。保育科学生の親準備性獲得の実態を明らかにすることが求められる。

また、保育科学生と他学部生の親準備性を比較することで、保育を専門に学んだ者と学んでいない者の、子どもや育児に対する認識の違いを明らかにすることができる。この違いは、保育現場における、保育士と保護者の違いに通じるものがあるだろう。保育を専門に学んでいない保護者の親準備性の獲得状況を知ることで、保護者に対する理解が深まり、配慮すべき点も明確になると考えられる。

以上をふまえ、本研究では、保育科4年生、1年生、他学部生の親準備性の獲得状況を調査することを目的とする。これにより、保育士養成課程での学習が、親準備性の獲得にどのような影響を及ぼすのかを検討する。さらに本研究では、保育科学生と他学部生が、どのように子

どもと関わるのかをあわせて調査する。中川・村松（2010）は、子どもとの接触経験がある女子大学生は、接触経験がない女子大学生よりも、あやし行動やあやし言葉のレパトリーが多いことを明らかにしている。これをふまえると、保育科4年生では、子どもとの関わり方が多様であることが予想される。保育科学生と他学部生の違いを行動的側面から検討することで、保育を学んだ者とそれ以外の者との違いをより明確にすることができるだろう。結果をふまえ、保育科学生の親準備性の獲得過程、保育現場での保護者理解と支援の在り方を考察する。

2. 方法

（1）参加者

保育科4年生33名（全員女子）、1年生35名（全員女子）、他学部生73名（全員女子）に調査を行った。他学部生は、経済学科37名、栄養学科23名、生活環境学科（建築、被服等）13名であった。

（2）質問項目

1) 親準備性に関する質問

佐々木（2007）が作成した、親準備性尺度の項目を使用した。この尺度は、「乳幼児への好意感情」を測定する質問9項目と、「育児への積極性」を測定する質問13項目で構成される。

乳児への好意感情は、「赤ちゃんが好きである」、「赤ちゃんのことについて知りたいと思う」、「赤ちゃんを抱いてみたいと思う」など、乳児に対する興味や関心、ポジティブな感情を測定する質問である。

また、育児への積極性は、「育児は素晴らしい仕事だと思う」、「将来育児をするのが楽しみだ」、「育児によって自分自身もまた成長できると思う」など、育児に対する肯定的な感情、積極的な態度を測定する質問である。

上記の22項目に加え、川瀬（2010）が使用した質問項目も使用した。川瀬（2010）は、子どもとふれあうボランティア体験が親準備性にどのような影響をもたらすかを検討するために、「育児機会」、「育児への自信」、「親になるイメージ」を尋ねる質問項目を使用した。

育児機会は、「普段の生活で、乳幼児と遊ぶ機会がある」、「普段の生活の中で、子どもをあやしたり、オムツを替えたりするなど乳幼児の世話をする機会がある」の2項目であり、日常的な子どもとの関わりや世話の頻度を調査する質問である。

育児への自信は、「自分ひとりで、しばらくの間、乳幼児を世話する自信がある」、「しばらくの間、乳幼児と楽しく遊ぶ自信がある」など4項目で、子どもとの関わりに対する自信の程度を調査する質問である。

親になるイメージは、「将来、自分が親になる姿をある程度想像することができる」、「子どものいる生活がある程度明確にイメージすることができる」の2項目であり、親である自分や育児をしている自分を想像できるかどうかを調査する項目である。

以上の計30項目について、自分自身にどの程度当てはまるかを5段階（5. とてもそう思う～1. 全くそう思わない）で評定してもらった。

2) 日常場面での乳幼児への関わり方に関する質問

女子大学生の乳幼児への関わり方の実態を明らかにするために、日常場面で出会う可能性のある子どもと関わる場面を2つ作成した。

第一は、子どもが泣いている場面である。具体的には、「電車で泣いている赤ちゃんがいます。あなたは隣の席に座っています。あなたなら何かしますか?」と場面を提示し、関わり方を自由に記述してもらった。

第二は、子どもが関わりを求めてくる場面である。具体的には、「カフェで隣の席に子どもが座りました。あなたに向かっておもちゃを差し出しています。あなたなら何かしますか?」という場面を提示し、自由記述してもらった。

二つの場面は、乳幼児のネガティブな反応(泣き)とポジティブな反応(接近)を示す場面である。価値の異なる2つの場面での関わり方を調査することで、女子大学生の乳幼児への関わり方を具体的に調査することを目指した。

(3) 手続き

調査は大学の授業内で行った。調査にあたり、研究の趣旨を説明した。また、参加は任意であること、成績評価とは関係がないことを伝え、質問紙への回答をもって、研究協力への同意を得た。回答時間は約10分であった。

3. 結果と考察

(1) 親準備性の得点比較

個人ごとに、乳幼児への好意感情、育児への積極性、育児機会、育児への自信、親になるイメージの合計点を算出した。その上で、各学科・学年の平均値を求め、分散分析を行った(Figure 1)。

結果、全てのカテゴリで有意差があった。多重比較の結果、乳幼児への好意感情は、保育科4年生(平均40.36)、1年生(42.92) > 他学部生(33.27)であった($F(2, 138) = 34.01, p < .01$)。保育科学生は他学部生よりも、乳幼児に対して好意を抱いており、興味・関心が高いといえる。また、育児への積極性は、保育科4年生(45.58)、1年生(48.74) > 他学部生(42.74)であり($F(2, 138) = 11.41, p < .01$)、保育科学生は他学部生よりも、育児に対して積極的な考えや態度をもつ

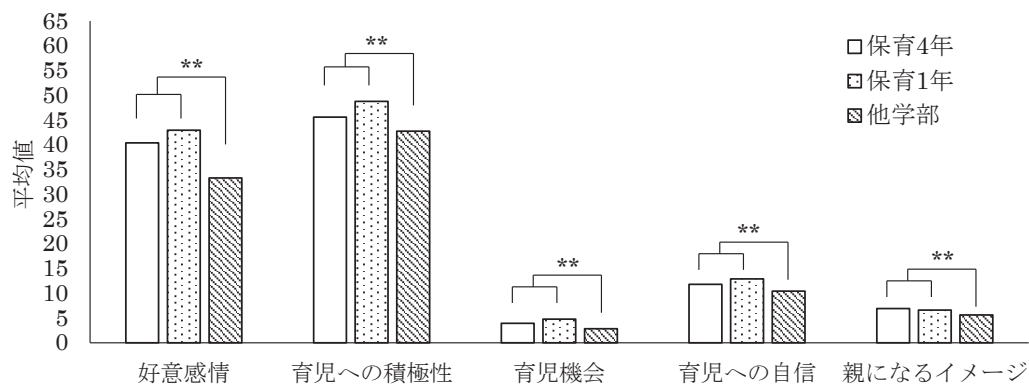


Figure 1 各尺度得点の学科・学年別の平均値

ていた。

同様に、育児機会では、保育科4年生(3.94)、1年生(4.77) > 他学部生(2.82)であった($F(2, 138) = 11.12, p < .01$)。保育科学生は他学部生よりも、子どもと触れ合う機会や世話をする機会が多いといえる。また、育児への自信、親になるイメージも、保育科4年生(順に、11.82, 6.91)、1年(12.91, 6.60) > 他学部生(10.43, 5.62)であり($F(2, 138) = 11.48, p < .01$; $F(2, 138) = 6.82, p < .01$)、保育科学生は他学部生よりも、子どもとの関わりに自信があり、育児をしている自分自身を具体的にイメージできるといえる。

以上の結果から、保育科学生は他学部生に比べ、1年生の時点である程度の親準備性を身につけていることが明らかになった。保育に関わる学科を専攻する背景として、乳幼児への好意感情や育児への肯定的態度、子どもと関わる自信などが影響しているといえよう。仮説では、保育科4年生の親準備性は1年生よりも高くなると予想した。しかし、全てのカテゴリで4年生と1年生の差はみられず、保育士養成課程での学習が親準備性を高めるわけではなかった。

(2) 日常場面での乳幼児への関わり

1) 分析方法

参加者から得られた回答を類似したもの同士に分類し、乳幼児への関わり方に関する行動カテゴリを3つ作成した。第一のカテゴリは「笑いかける」である。「笑いかける」や「微笑みかける」、「笑顔を見せる」など、乳幼児への笑いかけが読み取れる回答を「笑いかける」のカテゴリに分類した。第二のカテゴリは「あやす」である。「子どもに声をかける」などのコミュニケーション行動、「いないないばあをする」、「一緒に遊ぶ」などの乳幼児への積極的な関わりが読み取れる回答を「あやす」のカテゴリに分類した。第三のカテゴリは「何もしない」である。「何もしない」という回答に加え、「見守る」や「そっとしておく」など、乳幼児への関わりが見られない回答を「何もしない」のカテゴリに分類した。また、いずれにも分類できない回答は「その他」とした。なお、「その他」は回答数が少なかったため、分析からは除外した。

分析にあたり、他学部生を、親準備性の得点に基づき2つのグループに分けた。具体的には、他学部生の合計得点の平均値(94.88)よりも、得点が高い者を他学部高群(36名)、低い者を他学部低群(37名)とした。高群は、親準備性が比較的身につけている参加者である。一方、低群は、親準備性があまり身につけていない参加者である。群を分けて分析することにより、親準備性の獲得状況が乳幼児への関わり方にどのような影響をもたらすのかを検討する。

2) 行動カテゴリの分析

参加者の記述を、3つの行動カテゴリのいずれかに分類した上で、泣き場面、接近場面ごとに、各カテゴリの回答数の平均値を求め、分散分析を行った。

その結果、泣き場面(Figure 2)では、「笑いかける」と「何もしない」に有意差があった(順に、 $F(3, 137) = 4.74, p < .01$; $F(3, 137) = 6.45, p < .01$)。多重比較の結果、笑いかけるでは、保育科4年生(0.36)、1年生(0.46)、他学部高群(0.33) > 他学部低群(0.08)であった。また、何もしないでは、他学部低群(0.78) > 保育科4年生(0.46)、1年生(0.31)、他学部高群(0.44)であった。親準備性が低い他学部の学生は、保育科学生や親準備性が高い学生よりも、隣で子どもが泣いているときに、笑いかけることが少なく、何もしないことが多いといえる。

また、接近場面(Figure 3)では、「笑いかける」と「あやす」に有意差があった(順に、 $F(3, 137) = 3.48, p < .05$; $F(3, 137) = 4.42, p < .01$)。多重比較の結果、笑いかけるでは、他学

部低群 (0.30) > 保育科4年生 (0.09)、1年生 (0.28)、他学部高群 (0.28) であった。また、あやすでは、保育科4年生 (0.85)、1年生 (0.86)、他学部高群 (0.89) > 他学部低群 (0.60) であった。親準備性が低い他学部の学生は、保育科学生や親準備性が高い学生よりも、子どもが接近してきたとき、笑いかけることは多いが、積極的に声をかけたり、遊んだりすることは少ないといえる。

以上の結果から、他学部生の場合、親準備性の獲得状況が、乳幼児への関わり方に影響することが明らかになった。特に、親準備性があまり身につけていない学生は、ネガティブ、ポジティブ両方の場面で、乳幼児との積極的な関わりを避ける様子が示された。乳幼児への好意感情の低さや育児への自信なさなどが、乳幼児との接触を避ける方向に働くことが示唆される。

これに対して、他学部生であっても、親準備性が比較的身につけている学生は、保育科学生と同じように乳幼児に関わろうとする様子がみられた。日常場面での乳幼児への関わりは、保育の専門的知識の有無に影響を受けるわけではなく、子どもへの好意感情といった親準備性の影響が強いことが示唆される。

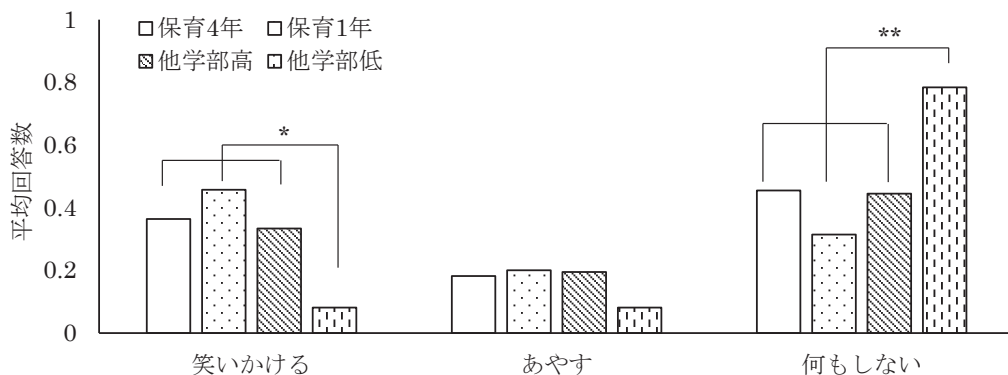


Figure 2 泣き場面での行動カテゴリの平均値

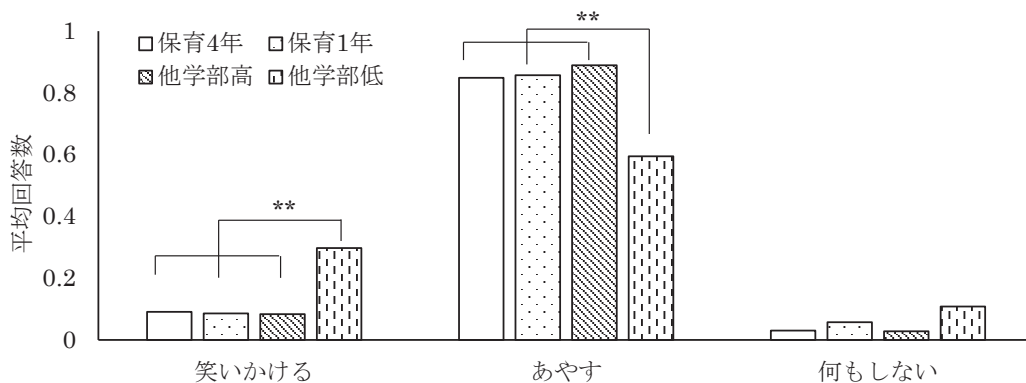


Figure 3 接近場面での行動カテゴリの平均値

4. 全体考察

本研究では、保育科4年生、1年生、他学部生を対象に、親準備性の獲得状況を調査した。その結果、親準備性の全カテゴリにおいて、保育科4年生と1年生の得点は同程度であり、他学部生の得点よりも高かった。このことから、保育科学生は、1年生の時からすでに親準備性を獲得していることが明らかになった。また、子どもへの具体的な関わり方を調査した結果、他学部生のうち、親準備性が高い学生は、保育科4年生、1年生と同様に子どもに対して積極的に関わる一方で、親準備性が低い学生は子どもとの積極的な関わりを避けることが明らかになった。他学部生では親準備性の獲得状況によって、子どもへの関わり方が異なることが示唆される。以上をふまえ、以下では保育科学生の親準備性の獲得過程、保育現場での保護者理解と支援の在り方を考察する。

(1) 保育科学生の親準備性の獲得過程

保育科1年生は保育の専門的な学習をはじめて間もない時期であり、子どもや保育に関する学習の量は、他学部生とほぼ同じであると考えられる。そのため仮説では、保育科1年生と他学部生の親準備性は同程度であり、保育科4年生で最も親準備性が高いと予想した。しかし、実際には保育科1年生の親準備性は4年生と同程度であり、他学部生よりも高かった。このことから、保育科1年生は、保育の専門的な学習をする前から、子どもへの好意感情や子どもと関わる自信をある程度身につけているといえる。保育科学生の親準備性は、保育士養成課程を通して培われるというよりも、保育士養成課程の入学前、幼少期から思春期にかけて培われることが示唆された。

それでは、保育の専門的な学習は保育科学生の親準備性に影響を及ぼさないのであろうか。本研究では、個人差をふまえず、保育科4年生と1年生の比較を行った。そのため、個人によっては、保育士養成課程を通して親準備性を高めた者もいれば、逆に親準備性を低めた者もいる可能性がある。個人による親準備性の変化の違いが、1年生と4年生の得点に差が見られなかった原因の一つであるとも考えられる。今後の研究では、個人差をふまえ、いかなる場合に親準備性が向上するのか、またいかなる場合に親準備性が低下するのかを詳細に検討する必要がある。

(2) 保育現場での保護者理解と支援の在り方

先行研究から、親準備性は親や教師からの被養護体験、身近な乳幼児への養護体験により獲得されることが明らかになっている。本研究では、養成校入学時点から、保育科学生と他学部生の親準備性には違いがあることを明らかにした。つまり、保育科学生と他学部生の親準備性の違いは、幼少期から思春期にかけての被養護体験や養護体験から生まれるものであることが示唆される。

ただし、親準備性の獲得状況には個人差があり、本研究においても親準備性が高い他学部生が多数存在した。また、親準備性が高い学生は、子どもに積極的に関わる様子が示された。これらの学生は、幼少期から思春期にかけての被養護体験や養護体験が、保育科学生と同等か、豊富であったのであろう。一方、親準備性が低い学生は、子どもとの関わりを回避する様子が示された。手厚い子育て支援が必要となるのは、このような親準備性を獲得していない保護者

であると考えられる。

それでは、親準備性を獲得していない保護者に対して、どのような支援が必要になるのだろうか。第一は、保護者と子どもの様子を日頃から観察することである。本研究より、親準備性が低い者は子どもとの関わりを避ける様子が示された。子どもが泣いている時に声をかけていない、子どもが関わろうとしているのに一緒に遊んでいないなどの様子が見られた時は、親準備性が十分に身につけていないことが予想される。保護者支援の第一のステップとして、日常的な観察の中から、保護者の親準備性の獲得状況を把握することが求められる。

これに加えて、保育士は、保護者の親準備性の獲得過程を理解する必要がある。本研究の結果から、保育科学生と他学部生とでは、幼少期から思春期までの体験が異なる可能性が示唆された。つまり、親準備性の低い保護者は、保育士やその他の保護者に比べて、誰かに養護される(大切に扱われる)経験や、誰かを養護する(大切に作る)経験が少なかった可能性がある。そのため、養護の態度や技術が身につかず、子どもを養護することに戸惑いを感じるのだろう。子どもとの関わりを避けがちになるのは、関わり方や態度を学習していないためであることを理解し、保育士がモデルとなり、子どもとの関わり方を伝えていくことが求められる。

さらに、保護者の被養護体験を保障することも重要であると考えられる。先にも述べたとおり、親準備性の獲得には被養護体験と養護体験が関わっている。このうち、養護体験は親として子どもと関わる中で体験を積み重ねていくことができる。一方で、被養護体験は、自分自身が親となった状況では、体験する機会があまりないと考えられる。そうであるならば、保育士が保護者を大切に、養護することが求められるだろう。柏木・若松(1994)は父親の家事・育児の参加、藤田・金岡(2002)は母親へのソーシャルサポートが、母親の子育てに対する肯定的感情を高めることを指摘している。これらのサポートは一種の被養護体験であり、被養護体験が親になった時であっても親準備性の獲得に影響することを示唆している。親準備性の低い保護者への支援は、保育士が保護者を大切にすることで、大切にされるとはどのようなことなのかを体験的に気づいてもらうことが求められると考えられる。今後の研究では、保育士の被養護体験が、保護者の親準備性にいかなる影響を及ぼすのかを検討することが求められる。

保育現場での子育て支援は、今後もますます重要となるだろう。子どもが健全に成長・発達するためには、家庭との連携が欠かせない。保育士は保護者の特性を理解し、保護者の子どもに対する好意感情や育児への積極性を高めることを目指し、保護者自身を養護しながら、支援をしていく姿勢が求められる。

引用文献

- 陳省仁(2007). 現代日本の若者の養育性形成と学校教育子ども発達臨床研究, 1, 19-26.
- 藤田大輔・金岡緑(2002). 乳幼児を持つ母親の精神的健康度に及ぼすソーシャルサポートの影響 日本公衆衛生雑誌, 49, 305-313.
- 保育士養成課程等検討会(2017). 保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～(検討の整理) 全国保育士養成協議会 Retrieved from <https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/member/news/2017.html/review1.pdf> (2017年9月17日)
- 岩田崇・秋山泰子・井上義明・深谷和子(1982). 青年期の親準備性に関する研究 昭和57年度厚生省心身障害研究報告書「母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的ならびに社会小児科学的意義」に関する研究, 466-467.
- 柏木恵子・若松素子(1994). 「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心

- 心理学研究, 5, 72-83.
- 川瀬隆千 (2010). 大学生の親準備性に関する研究宮崎公立大学人文学部紀要, 17, 29-40.
- 榎澤令子・福本俊・岩立志津夫 (2009). 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 教育心理学研究, 57, 168-179.
- 水口由紀子・中新美保子・井上信次 (2017). 青年期大学生の親準備性を育む要因の検討 川崎医療福祉学会誌, 27, 63-73.
- 中川愛・松村京子 (2010). 女子大学生における乳児へのあやし行動: 乳児との接触経験による違い 発達心理学研究, 21, 192-199.
- 贅育子・中川名帆子 (2016). 母性看護学実習前後における女子大学生の親準備性の変化に関する実態調査 ヒューマンケア研究学会誌, 7, 55-61.
- 岡本祐子・古賀真紀子 (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理学研究, 4, 159-172.
- 佐々木綾子 (2007). 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, 8, 41-50.
- 鈴木真由子・六車悠理 (2019). 家庭科保育学習における親性準備性の検討 教科教育学論集, 18, 27-33.
- 礪波朋子 (2011). 女子大学生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び養護性との関連 京都光華女子大学研究紀要, 49, 13-25.

付 記

本研究は、第二著者の平成30年度卒業論文の研究データを、第二著者の承諾のもと、第一著者が再分析し、執筆したものです。調査にご協力頂きました学生の皆様、ありがとうございました。

